主題：キリストを経験し、享受し、表現する

メッセージ　3

福音書において（3）

天的に支配された行為のある方、わたしたちの牧者、わたしたちの安息、種まく者

聖書：マタイ 9:20-22, 36．11:28-30．13:3, 18-23

Ⅰ．キリストは、天的に支配された行為（彼の衣の房）のある方として啓示されています——マタイ 9:20-22：

Ａ．キリストの衣は彼の義なる行為を表徴し、房は天的な支配を表徴します：「イスラエルの子たちに語って、彼らが代々にわたって衣のすそに房を作るよう、またそのすその房に青いひもを付けるように告げなさい。それはあなたがたのための房であって、あなたがたがそれを見るとき、エホバのすべての命令を思い起こしてそれを行なうためであり……あなたがたの神に対して聖なるものとならなければならない」——民 15:38-40：

１．ひもは束縛することを表徴し、青は天的であることを表徴します。

２．ですから、青いひもは、神の子供たちとして、わたしたちの行為と振る舞いが美しくあるべきであり、天的な管理、制限、規制の支配、管理、束縛の下にあるべきであることを表徴します。

Ｂ．衣は人の振る舞いにおける美徳を表徴します。主の衣は、彼の人性、彼の人性の美徳の完全さにおける彼の完全な振る舞いを表徴します。

Ｃ．主イエスの人性の美徳には、いやす力がありました。ですから、病んだ女が彼の衣の房に触れたとき、彼の美徳の力が彼女へと出て行き、彼女はいやされました。

Ｄ．キリストの天的に支配された行為から、いやす力となる美徳が出て来ます——マタイ 14:36。

Ｅ．主の衣に触れることは、実は人性における彼に触れることであり、彼の人性の中に神が具体化されています（コロサイ 2:9）。そのように触れることによって、彼の神聖な力が、彼の人性の完全さを通して、彼に触れたものの中へと注入され、それは彼女のいやしとなりました（ルカ 8:45-48．ヘブル 12:2 前半）。

Ｆ．近づきがたい光の中に住む神が、奴隷・救い主の中で、彼の人性を通して、彼女の救いと享受のために、近づけるものとなりました——Ⅱコリント 4:13。

Ｇ．押し迫る群衆は奴隷・救い主から何も受けませんでしたが、彼に触れた者は受けました（参照、詩歌、412 番, 2 節とおりかえし）。

Ⅱ．主イエスはわたしたちの牧者であり、わたしたちは彼の羊です——マタイ 9:36．イザヤ 40:11．53:6．エゼキエル 34:1-5, 11-15：

Ａ．彼は、緑の牧場としてのキリストと、憩いの水辺としてのその霊を享受するという初期の段階で、わたしたちを牧養します——詩 23:1-2．Ⅰテモテ 1:4．ピリピ 1:19 後半．ヨハネ 21:15．Ⅰテサロニケ 2:7．Ⅰコリント 12:13 後半。

Ｂ．彼は、義の道での復興と造り変えという第二段階で、わたしたちを牧養します——詩

23:3．ローマ 12:2．ヨハネ 7:38．ローマ 8:4。

C．彼は、死の影の谷を歩いているとき、復活した霊なるキリストの臨在を経験するという第三段階で、わたしたちを牧養します――詩 23:4．Ⅱテモテ 4:22．Ⅱコリント 12:7-10。

D．彼は、復活したキリストをさらに深くさらに高く享受するという第四段階で、わたしたちを牧養します――詩 23:5：

1．主はわたしたちの前で、わたしたちの敵の前に宴席を設けます―― 5 節前半．参照、サムエル下 4:4．9:7, 13．創 14:18-20．ネヘミヤ 4:17。

2．主はわたしたちの頭に油を塗り、わたしたちの杯は満ちあふれています――詩 23:5 後半．ヘブル 1:9．Ⅰコリント 10:16 前半, 21。

3．詩第 23 篇 5 節には三一の神、すなわち祭りとしての御子、塗る油としてのその霊、祝福の源としての御父があります。

E．彼は、エホバの家で神聖な良きものと慈愛を生涯、享受するという第五段階で、わたしたちを牧養します―― 6 節：

1．霊なるキリストの有機的な牧養の下で、わたしたちの命の日の限り、良きものと慈愛がわたしたちを追いかけてきます。わたしたちは日々いつまでもエホバの家に住みます―― 6 節：

a．良きものはキリストの恵みを指しており、慈愛は御父の愛を指しており、追いかけてくるとはその霊の交わりを暗示します。こうして、御子の交わり、御父の愛、その霊の交わりがわたしたちと共にあります――Ⅱコリント 13:14。

b．手順を経て究極的に完成された三一の神の享受は、日々いつまでも（現在の時代において、来たるべき時代において、永遠において）、わたしたちを神の家における神の享受（キリスト、召会、新エルサレム――ヨハネ 1:14．2:21．Ⅰテモテ 3:15-16．エペソ 2:22．啓 21:2-3, 22）へともたらします。

2．わたしたちは命の日の限り、神の家に住むことを求める必要があります――詩 27:4-8：

a．神の麗しさ（愛、楽しみ、喜び）を見つめる―― 4 節前半, 8 節．Ⅱコリント 3:18。

b．神に尋ね求め、わたしたちの日常生活におけるすべてについて神に確かめる――詩 27:4 後半．参照、ヨシュア 9:14。

c．神の避け所にかくまわれ、神の天幕の隠れ場に隠れる――詩 27:5 前半．31:20。

d．神によって上げられ、頭が高く持ち上げられる―― 27:5 後半-6 前半。

e．喜びの叫びの犠牲をささげ、神の栄光のために神に向かって歌い、詩を歌う―― 6 節後半．ヘブル 13:15．ピリピ 2:11。

Ⅲ．主イエスはわたしたちの安息です――マタイ 11:28-30：

A．「すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに来なさい．そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える」―― 28 節：

1．ここで述べられている労苦は、努力して律法の戒めや宗教の規則を守る労苦を指しているだけでなく、どの働きでも成功しようと奮闘する労苦も指しています。このように労苦する者はだれでも、常に重く重荷を負っています。

2．安息は、律法や宗教の下、あるいはどの働きや責任の下にもある労苦と重荷から

解放されることを指しているだけでなく、完全な平安と十分な満足も指しています。

B．「わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい．そうすれば、あなたがたは魂に安息を見いだす。なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」―― 29-30 節：

1．主のくびきを負うとは、御父のみこころを取ることです。それはどの働きによっても規制されたり制御されたりすることではなく、御父のみこころによって抑制されることです。

2．主はそのような生活をして、ただ御父のみこころだけを顧みました（ヨハネ 4:34．5:30．6:38）．彼は御父のみこころに完全に服従しました（マタイ 26:39, 42）。ですから、彼はわたしたちに、彼から学ぶようにと求めるのです。

3．彼から学ぶとは、外側で彼に倣うことではなく、主のくびき（神のみこころ）を負って、わたしたちの霊の中で主を複写することです。神のみこころは、わたしたちにくびきを負わせなければなりません。わたしたちは自分の首をこのくびきの中に入れて、彼の複製とならなければなりません―― I ペテロ 2:21。

4．わたしたちが主のくびきを負い、彼から学ぶことによって見いだす安息は、わたしたちの魂のためです。それは内なる安息であって、単に性質が外側の何ものでもありません。

5．主のくびきは御父のみこころであり、彼の荷は御父のみこころを遂行する働きです。そのようなくびきは負いやすく（良く、優しく、柔和で、穏やかで、喜ばしい――きつく、厳しく、つらく、苦しいのとは対照的に）、そのような荷は軽く、重くはありません。

Ⅳ．種まく者は主イエスのすばらしいパースンであり、まかれた種も三一の神の具体化としての主ご自身です――マタイ 13:3, 18-23：

A．わたしたちは種まく者であるキリストが、ご自身を命の種として人類の中へとまくというビジョンを見る必要があります。このビジョンは主の回復の心そのものです。なぜなら、それは主の心の願いと関係があるからです。

B．彼はわたしたち、彼の選びの民の中へと入って来て、ミングリングの方法でわたしたちの命となり、ご自身をわたしたちの要素とし、わたしたちを彼の表現とすることを願っています。

C．神の命をもってキリストの中で再生された信者たちは、神の耕された地、神の新創造における農場であって、キリストを成長させ、神の建造のために尊い材料が生み出されます―― I コリント 3:9, 12 前半。

D．聖書によれば、成長は建造と等しいのです。これが起こるのは、わたしたちの内側の命の神聖な種が成長することによります―― I ヨハネ 3:9．コロサイ 2:19．エペソ 4:15-16。

E．エペソ第 3 章 17 節が啓示しているのは、三一の神がわたしたちの中へと入って来て、ご自身を要素とし、またわたしたちからのものを材料として、建造の働きを行うということです。これはマタイ第 13 章の種まく者のたとえで例証されます：

1．主は命の種としてのご自身を、土壌である人の心の中へとまきます。それは、彼

が彼らの中で成長し生きて、彼らの内側から表現されるためです―― 3 節。

2．種は土壌の中へとまかれ、土壌の栄養素をもって生長します。その結果、産物は種と土壌の両方からの要素の組成です―― 23 節。

3．わたしたちは内側に、神によって創造されたある栄養素を持っています。それは、彼がわたしたちの中へと入り、わたしたちの中で成長するための準備です。神は人の栄養素を持つ人の霊、それに沿って神聖な種のための土壌である人の心を創造しました――Ｉペテロ 3:4。

4．わたしたちが命の中で成長する割合は、神聖な種にかかっているのではなく、わたしたちはどれほど多くの栄養素をこの種に供給するかにかかっています。わたしたちが栄養素を供給すればするほど、種はますます速く生長し、ますます繁茂します――マタイ 5:3, 8。

5．もしわたしたちが自分の魂に、自分の天然の人にとどまっているなら、神聖な種が生長するための何の栄養素もないでしょう。しかし、わたしたちが内なる人の中へと増強され、わたしたちの霊に注意を払い、わたしたちの霊を活用するなら、栄養素は供給され、キリストはわたしたちの心の中にご自身のホームを造ります――エペソ 3:16-17．ローマ 8:6．Ｉテモテ 4:7．参照、ユダ 19 節。

6．命の種としての主をわたしたちの内側で成長させ、わたしたちの満ち満ちた享受とならせようとするなら、わたしたちは絶対的に主に開き、彼と協力して、わたしたちの心を徹底的に対処しなければなりません――マタイ 13:3-9, 18-23。

7．一方で、神は要素としてのご自身をもってわたしたちを増強し、もう一方で、わたしたちは栄養素を供給します。この二つを通して、キリストにある神は彼の内在的な建造、すなわち彼のホームの建造を、わたしたちの全存在の中で完成します。

© 2010 Living Stream Ministry